こどものまなざし

2023 年 3 月
<8 号>

～音声や手指で触ることなどを頼りに歩く～

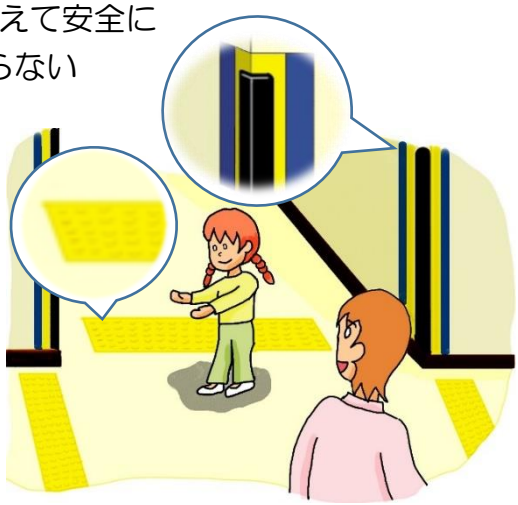
見えにくさを補う方法として、音を頼りにしたり手で触って確かめたりするなどの方法があります。今回はあるエピソードをもとに、見えにくさのあるお子さんが音や手で触ることを頼りにしている一例をご紹介します。

ある日の朝、廊下を歩いているときに一人のお子さんにすれ違いました。場面はちょうど右の図のような位置で、そのお子さんは左側に向かってトイレから教室に戻る途中でした。そこで、おはようと声をかけたところ、挨拶を返してくれたのですが、廊下の四辻の反対側にいた私の方に近寄ってきてしまいました。そのため、そのお子さんは教室に戻るはずだったのに方向が分からなくなってしまったのです。声をかけたタイミングが悪かったと反省し、教室に誘導しました。

そのお子さんは、普段であればひとりで慣れた壁の手触りを手がかりに伝い歩きしながらスムーズに移動ができているのですが、手で触る頼りがない四辻だったので、声の聞こえる方向についつられてしまったのだと思います。壁を伝っているときや、進行方向の正面から声をかけていれば、方向を見失うことはなかったでしょう。

ちなみに、上のイラストは簡略化していますが、実際は下のようになっています。違いはすぐに分かりますよね。見えにくさのある方にも、角が分かりやすいように色のコントラストをはっきりつけてあるのと、万一ぶつかってもケガをしないように中央にクッションがつけられています。そして、床には点字ブロックで曲がり角があるなどの変化があることを促しています。

見えにくさがある人にとっては、歩行は常にその環境を捉えて安全に気をつけていなければならない活動の 1 つです。視覚に頼らないぶん、風の流れや声の方向が変わることで曲がり角の位置を把握します。また、壁や家具などを触って確認できない空間の横断をするときには、イラストのように手を前に出して、衝突を回避する防御姿勢という安全確保をする方法を身につけます。



外出時に安全な歩行ができるためには、本人が身につける力も大切ですが、駅のホームの点字ブロックや音の出る信号機といった歩きやすい環境の整備、そして社会の理解も不可欠です。社会の理解の例でいえば、先日バスに乗っていたところ、白杖を使用している男性が乗ってこられました。運転士さんが気付いて、座席をお譲りください、とアナウンスをされました。そして、近くにいた方がその男性を座席まで誘導していました。着席を確認してからバスは動き出したのですが、その一連の流れがとても自然でした。

こうした配慮が社会に浸透していけばいくほど、見えにくさのある人にとっては、安全に外出することがより負担なくスムーズに行えるようになります。本人が力を伸ばすことと同じくらい、点字ブロックなどの環境の整備や、手伝いを申し出るといった社会の理解が必要なことを、私たちは心に留めておきたいと思います。